化粧道具類

化粧の基礎が整った江戸時代には、肌を白く見せるための白粉や眉化粧、紅、自分を写す鏡なども道具として定着した。白粉や紅、整髪用の油をあつかう問屋や小間物屋、行商人は宣伝のために歌舞伎役者や遊女の姿をヴィジュアル的な宣伝材料に用いた。



伊万里赤絵白粉溶き丸形三段重（江戸後期～明治）

「色白は七難かくす」といわれ、色を白く見せるための白粉は不可欠だった。一番深い最下段に水を入れ、他の2段を白粉入れ、溶き皿として使用していたとされる。



歳寒三友（松竹梅）の図十角形染付油壷

整髪用の油を入れる容器。女性の片手に乗るサイズで、古伊万里のものが多い。江戸時代はごま油・くるみ油・菜種油、江戸後期になると椿油なども使われた。



鏡台（欅製　幕末）

蓋裏に鏡架を差し込み、柄鏡を立てかけて用いる。2、3段目の引出しには白粉入れ・紅猪口・白粉刷毛・紅筆・房楊枝などを収めた。



ガラス油壷（明治頃）

ガラス製の油壷は江戸時代にも作られていたが、文明開化がすすみ、中央政府の支配体制が安定し始めた明治10年前後頃から登場したとされる。大正時代にガラスの量産が始まり、貴族や豪商の一部の人々の占有から、大衆のものになった。



松竹梅鶴亀文様柄鏡（天下一人見和泉掾重次　江戸）

円形の鏡胎に持ち手（柄）をつけた鋳銅鏡は室町時代に登場した。錫と銅の合金の青銅製で表面を磨いて用いる。通常は鏡箱に入れておき、化粧の際は鏡立てにかけ、もう一面を手に持って合わせ鏡にすることも多かった。



白粉入れ顔洗い粉「朝顔」包み紙（明治）

仏教の伝来で澡豆（小豆の粉）に生薬を混ぜて作った天然の洗顔料が広まった。銭湯が普及していた江戸の町では澡豆洗顔が盛んになり、紅絹の袋に入れて顔や肌を磨いたという。明治時代に石鹸需要が高まるも国産石鹸の品質が確立しておらず、糠袋や顔洗い粉も引き続き使われた。

描かれた化粧・装身具

庶民の風俗が多く描かれた浮世絵には、女性の化粧姿や道具、自分では結うことができない結髪を手がける女髪結の姿を見ることができる。流行は遊女たちから発信されることが多く、髪に櫛・簪・笄を挿した遊女が多く描かれた。



集女八景　洞庭秋月（襟白粉）（五渡亭国貞　江戸後期）

中国湖南省の洞庭湖に流れる2つの河川瀟水と湘江に広がる風光明媚な名勝「瀟湘八景」になぞらえた美人画。鏡台の柄鏡と手に持った柄鏡を合わせ鏡にして、もろ肌脱ぎで襟足の白粉のつき具合を確かめている。



鏡を持つ女（作者不詳　大正12年〔1923〕）

後ろ向きに立ち、柄鏡に映る女性はお歯黒のない未婚の女性。前髪の根元に櫛、髷の中央に笄、髷と鬢には5本の簪。櫛・簪・笄の材質は揃いで、黒っぽい部分もあるため斑入りのべっ甲製か。



君たち集り粧ひの図（三代歌川豊国　安政4年〔1857〕）

吉原の遊女たちの身支度風景。前に座る女性の髪を後ろの女性が結い、さらにその女性の髪を女髪結が結っている。女髪結の丸髷には結髪用の櫛が飾り（簪）として挿してある。







女禮式内婚禮之図（楊洲周延　明治26年〔1893〕）　花嫁は白無垢姿に牡丹形の花簪、額に殿上眉という丸い眉で、公家や武家の上流階級の女性とわかる。花嫁の手を取る女性たちは、笄に髪を片方だけ巻きつけた片外しという高位の御殿女中の髪形。婚礼は夕方から夜に行われていたので、手燭と角形雪洞を灯した。

※本展では髪飾りの発展にあわせ、1680年頃までを江戸初期、天和・貞享（1681～88）から享保期（1716～36）以前を江戸中期、享保期から1868年までを江戸後期、嘉永元年（1848）以降を幕末とした。

館蔵品展

櫛・簪・笄

くし　かんざし　こうがい

身だしなみの美妙巧緻



1　結髪用本黄楊櫛　髪掻き
2　三つ巴文散らし文様べっ甲蒔絵櫛（幕末～明治）
3　藤の花つまみ簪（昭和）
4　花嫁用セルロイド簪（大正）
5　緑色ガラス笄
6　一輪牡丹に蝶文様金象嵌杵形笄（幕末）

2026年 9月8日（火）－10月25日（日）

山崎記念
中野区立歴史民俗資料館

櫛

髪を梳る実用的な解櫛・梳櫛のほかに、髪を飾る装飾品としての挿櫛は縄文時代の出土品にも見られる。結髪の習慣が発達する天和・貞享（1681～88）頃に飾り櫛が出始める。材質は木・べっ甲・象牙・銀・真鍮・セルロイド、技法は漆・蒔絵・螺鈿・象嵌・透彫など多彩に広がった。



六歌仙文様蒔絵べっ甲櫛（江戸）

六歌仙は『古今和歌集』の序で紀貫之が論評した平安時代初期の歌道にすぐれた僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大伴黒主の6人。『古今和歌集』の権威の高まりで能・狂言・歌舞伎の題材となった。両面に人物がぴったり重なるよう蒔絵がほどこされる。



黒漆霰地満月瑠雲に丹頂鶴金蒔絵べっ甲櫛（幕末）

霰が地面に降り落ちたかのように、小さく頭の丸い突起が整然と並ぶ文様。落ち着いた地色に丹頂鶴の頭頂部の「丹」（赤）が差し色になっている。



道成寺物語白甲透彫黒甲象嵌べっ甲櫛（大正～昭和初期）

僧・安珍に恋した清姫の悲恋の伝説は能・人形浄瑠璃・歌舞伎の題材となった。べっ甲の黒い部分（黒甲）に般若の相貌になった清姫、歌舞伎舞踊「京鹿子娘道成寺」で主人公がかぶる烏帽子などがあらわされ、べっ甲の白い部分（白甲）に清姫が蛇身となり飛び込んだ日高川の波が彫られる。



つまみ細工櫛（昭和）

つまみ細工は小さな四角に切った絹布を細くとがらせた箸先（ピンセット）でつまみ、くす玉や花・動物を立体的に作る技法で江戸時代に始まった。大正から昭和初期には若い女性の外出用に好まれ、七五三の祝い用、舞妓の櫛・簪にも用いられる。



観世水文様透彫櫛（時代不明）

水の流れをデザイン化したもので、能楽の家元の一つ、観世家が観世大夫の定式文様として用いたことから名づけられた。象牙色と水流の涼やかな雰囲気から夏に用いられたものか。



梨地風神雷神文様漆絵蒔絵嵌装櫛（大正～昭和）

両面に風神・雷神が漆で描かれ、梨地技法（金粉を蒔いて梨の皮の表面のように仕立てる）で、表面がざらっとしたマットな質感の櫛。吉祥文でもある風神と雷神文様を身に着けることで、災厄を祓う意味もあるのか。

簪

身分や男女の区別なく、草木の花や枝を髪に挿して飾った奈良時代の「挿頭花」が語源とされる。正徳・享保（1711～36）頃に耳掻つきの二本足の簪が登場。材質と技法がもっとも多岐にわたり、技術が円熟期を迎えた江戸後期には、あらゆる形の「変り形簪」が作られ、髪を華やかに飾るアイテムの主役となった。



1　2　3

1. 寿文字文様平打簪（幕末～明治）

平打簪は薄い板状の地金に彫金や透かしの飾りをつけたもので、文化・文政期（1804～1830）から流行。頭部分の大きなものは武家の奥方用とされる。

2. ガラス玉に撫子文様蒔絵玉簪（昭和期、戦前）

洋装化が進んだ大正から昭和期は、和装にこだわる女性の必需品として、玉簪や平打簪が主流となり、洗練された上品なデザインのものが作られた。涼しげなガラス玉は夏用に好まれた。

3. 枇杷文様蒔絵象牙べっ甲簪（幕末～明治）

枇杷の実は象牙製、葉と枝部分はべっ甲製。枇杷は金色の実を多くつける姿が富の象徴とされた。



回転式花笠金銀珊瑚造りびらびら簪（明治頃）

びらびら（びらびら）簪は文化・文政期（1804～1830）から流行し、主に若い女性が用いた。銀製が中心だが、べっ甲や擬甲、江戸後期には珊瑚飾りつきも出た。江戸時代は地中海産紅珊瑚、明治初期から高知・長崎・鹿児島の珊瑚が使われた。珊瑚は仏教の七宝の一つで、赤い色は護身や魔除けとされた。



三味線棹とまねき猫変り形簪（幕末～明治）

明治時代前後で髪形が小ぶりになったためか脚の短い簪。左前足をあげるまねき猫は「千客万来」「人招き」の意味。三味線の胴皮は猫の腹皮が使われる。



藤棚に燕文様金銀びらびら簪（幕末～大正頃）

燕は春の訪れを告げ、子育ての姿から家庭円満、子孫繁栄の象徴。房状の花の咲く藤とともに、春から初夏に用いられたものか。

笄

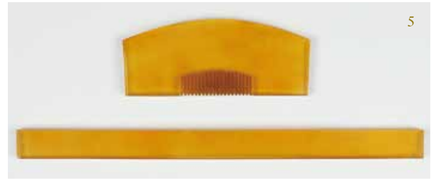
日本髪後部の髷に横（水平）に挿す細長い形状のもの。「髪掻」が語源とされ、1680年代に登場した笄髷という髪形に用いられた結髪道具。鯨の髭・竹・角・べっ甲・象牙・ガラス・翡翠・貝などで作られ、平板状・角棒状や両端が外せて着脱に便利なものも登場した。



4

4. 竜田川文様漆絵蒔絵べっ甲櫛・笄（明治）

奈良県北西部を流れる竜田川は、古代から沿岸の紅葉の美しさが歌に詠まれ、川の流れと紅葉の情景を描いたものを竜田川文様とよぶ。紅葉の葉脈の美しさと、赤くなりきっていない緑色が差し色として映える一品。



5

5. 白べっ甲（擬甲）櫛・笄（幕末～明治）

べっ甲（海亀の一種のタイマイの甲羅）は櫛の材料で最も人気が高く、笄でも正徳・享保（1711～36）頃から多く用いられた。黒い斑のない白べっ甲製が好まれたが、高価なため擬甲（模造品）が数多く作られた。



6

6. 鈴蘭文様翡翠玉嵌装水晶櫛・笄（大正～昭和）

国内の水晶は山梨県産がほとんどで、明治中期頃から使われ始めた。大正後期になると翡翠製も増え、鈴蘭の花弁先端の緑の斑点に見立てた翡翠が埋め込まれる。

鶴の脛骨笄（江戸）

鶴の脛骨（すねの内側の骨）は、長さと太さがちょうど笄に適し、江戸中期の天和・貞享（1681～88）頃に大流行し、最上品とされた。享保期（1716～36）には年配の既婚女性用となった。



波千鳥文様金銀透彫笄（秋田銀線細工　明治～大正）

銀線細工は良質な金・銀が産出された秋田藩で江戸時代から続く金属工芸。平戸（長崎）貿易を通じヨーロッパや東南アジアとの銀取引から技法が伝来したとされ、歴代藩主の保護・奨励下で、武具・キセル・簪などが作られた。



雷神太鼓吊り上げ文様蒔絵笄（江戸）

雷神があやまって海に落とした太鼓を錨で吊り上げようとする滑稽な姿を描き、どんな名人でも失敗する、という意味。滋賀県大津で売れた仏画・風刺画の「大津絵」の画題十種に「雷公」として登場する。